

特集
まえがき

科学者の国際連帯と日本科学者会議の役割

小野 一

科学者の国際連帯と聞いて、よほどの国粋主義者でもない限り、その重要性を否定する人はいない。だがこれだけでは漠然としていて、議論の手がかりをつかみにくい。2024年の日本で、日本科学者会議という目的意識を強く持った団体として、どのような問題の立て方をすべきだろうか。

自然科学系を中心に、地球規模でのデータ収集・解析がなければ研究が成立しない分野もある。それ以外の分野でも、最先端の研究や成果発表は国際的になされる。だが、専門家どうしの国際連帯、狭義の学术交流がすべてだろうか。

科学者は専門家である以前に、知識人であり、社会に生きる市民である。科学研究を生業とする幸運に恵まれたのなら、特権に傲ることなく、倫理観と誇りを持って、その成果を人類社会に役立てていく責任を有する。国際交流がさかんになる中、科学者に求められる徳性はますます重要である。

科学研究の国際的発展は、個人の倫理観や徳性だけではなしえない。一方では、科学技術の恩恵を独占的な利潤追求のために利用し、権力欲や領土欲のために悪用し、他者を抑圧し、地球環境の悪化により人類の生存を脅かすような動きもある。グローバル化の進む現代では、高度に発達した科学技術が誤った使われ方をされれば、損害も計り知れない。科学者の国際連帯運動は、政治権力や独占資本との緊張関係の中、人類の平和と福祉を守り、増進する責務を必然的に伴う。

日本は、戦争政策で諸国民に多大な害悪を

もたらし、その反省に立ち、平和への誓いを新たにした。福島原発事故は、自然災害と人災が複合する恐ろしさを示した。災害はその後にも頻発しており、これまでの教訓を未来に活かすべく、科学者の真価が問われている。

本特集に際して、3つの視角を設定した。第一に、分野ごとの国際的学术交流である。鬼頭、縣、今井、小金澤、藤巻論文が、最新情報と国際平和構築への視座を提示する。

第二に、21世紀の日本に生きる市民として、科学研究とその世界への発信をどう行うか。戦争体験の継承、戦後体制の問い直し、最新状況への対応など、さまざまな局面がある。ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ、オキナワなどの語も国際的に知られるようになった。個々の論点については、鳴原、名嶋論文を参照されたい。山本論文は、科学研究の最前線と戦争体験の継承を併せて論じる。

第三に、こうした活動を日本科学者会議としてどう展開するか。ローカルとグローバル。両者は二項対立的なものではない。地域密着型の地道な研究は日本科学者会議の誇るべき伝統であり、それを科学者の国際連帯の文脈で再構成していくべきである。専門分野を超えた学際研究、狭義の学術研究と市民科学との架橋も求められる。中塚論文は、先頃発足した「学際研究・市民科学発展プログラム」との関連でも興味深い。

本特集と関わる国際合意文書等を、資料として掲げた。私たちの国際活動の今後を考える参考になれば幸いである。

(おの・はじめ：工学院大学、政治学)